第５回岩見沢市障がい福祉計画策定委員会　要旨

日時：平成 30 年 3 月 16 日（金）14 時～15 時 20 分
場所：市役所　第 1・2 会議室

出席委員：　堀委員長、佐藤（惠）副委員長、三宅委員、佐々木委員、板井田委員、岩崎委員、齋藤委員、橘委員、湯浅委員、江田委員、内海委員、畑委員、北市委員、森口委員、川瀬委員、梅田委員、嵯峨委員、佐藤（昌）委員

欠席委員：　牧委員

事務局：　石崎健康福祉部長、出口健康福祉推進担当次長、瀬野福祉課長、青山福祉課主幹、山田障がい者福祉グループ担当主査、長谷川障がい者福祉グループ担当主任、三ツ浦主事

手話通訳者：佐々木嘱託員　林手話通訳者

＜委員長挨拶＞

堀委員長の進行により、障がい福祉計画第５期案及び岩見沢市障がい児福祉計画第２期案について事務局より報告後、意見交換
主な内容は次のとおり

＜岩見沢市障がい児福祉計画第２期案について＞

・本計画の文言について、教育委員会の何らかの計画と整合性を取らなければいけないのか、教育委員会の計画と一致するのか。
→岩見沢市の総合計画と文言を合わせている。

・当事者だけの努力で困難を克服するのは難しいことから、計画の中に環境整備を進めていくという表現があるとよかった。
→困難を克服と言う言葉については、あらためて教育委員会とも協議し、可能であれば別の文言を検討していきたい

・「困難を克服する」という表現は医学モデルの書き方なので、社会モデルに統一したほうがいい。
→修正する・しない、修正の方法など含めて検討していく。

・障がい者の家族から、気軽に足を運んでただ話を聞いてもらいたいという

希望があった。家族への支援というのがなかなか見えてこない。

・制度的なものではなく、障がい者の家族同士で状況を知ってもらうだけの、共感してもらう場所が少なく、在宅で孤立している人にはそういうケアが必要なのでは。計画に盛り込めなくても何か具体的に取り組めないか。

→日中一時支援や短期入所など、家族にリフレッシュを促す一時預かりの制度はあるが、リフレッシュする場の提供は行政ではできていないのが現状。どういった支援ができるか、地域福祉計画の中でも掲げているので、引き続き行政としても考えていきたい。

・ボランティアセンターでは傾聴のボランティア講座を開いている。育ったボランティアを行政として抱えていくか、センターから派遣するかといったことも考えてもいいのではないか。

・最初は公共施設のロビーのような場所で気軽に話をし、そのうちに出てきた思いや悩みに応じてボランティアセンターや市役所などへつなげていけるようなところがあるといいのでは。

・本当に相談したいと思っても、本人自身も何を相談したらいいかわからない場合もある。それを聞き出すには傾聴ボランティアでもいいが、相談支援事業所の情報を広く周知し、つなげてもらいたい。専門職につなげていけるような情報の公開を優先的にしてもらえればどこかにはひっかかってくるのではという印象を受けた。

・P17 の意見交換の部分、養護学校についての文章について、障がいの重い子も一般の学校に行くのがつらい、何とかならないのかと読み取ったが、発言者が言わんとしていたことを知りたい。

→教育の場面で、みんなが同じ環境の中で、その子に合った支援を受けながら過ごしていけるのが理想だが、現実問題として先生達も福祉のプロではない中で非常に障がいの重い子がいた場合、その子 1 人にかなりの人がつかないといけなくなり、教育の現場としても大変だという話だった。本人がどういう希望を持っているのかをくみ取りながら、一人ひとりのニーズに向き合っていくことが必要と考えている。

・サービスの見込量について、前回からの変更点があれば教えていただきたい。

→17 ページ目、生活介護の見込量を 379 人に増加。就労継続支援 B 型についても 420 人に増加。法人より提供事業所について見直したいという依頼があったため変更が生じた。

＜岩見沢市障がい福祉計画第５期案について＞

・方向性はいいと思うが、表現を少しやわらかくしてもいいのではないかと思う箇所がいくつかある。表現が伝わりにくい方も十分理解できるような表現がいい。

・地域が福祉行政や障がい者への理解をどこまで深められるかが一番大事なことと思う。障がい者が顔を出しやすい地域、障がい者を受け入れられる地域になるよう、地域福祉に関してさらに踏み込んでほしい。

＜その他＞

・正副委員長、事務局より挨拶。
・市長答申は 3 月 26 日。正副委員長が出席。